

巻頭言

過去・現在・未来

常務理事・京都大学名誉教授 西本 孝一

財団法人という組織はどうあるべきかという課題は、当建築研究協会も常に背負って歩まねばなりません。

当協会の将来を考える上においては、過去の歴史を十分に認識する必要があります。

昭和30年（1995）1月8日に設立、理事8名監事2名で理事長に岡田辰三京都大学工学部長が就任されました。当時は工学部の建築学教室内に協会の活動拠点を置き、建築文化の向上発展に寄与することを目的とし、その達成のために下記の事業を行うこととしています。

1. 京都大学工学部建築学教室の研究助成
2. 建築技術に関する調査及び研究並びにそれらの受託又は委託
3. 建築技術に関する研究の助成
4. 建築技術に関する文献の刊行
5. その他目的を達成するため必要な事業

その後、建築学教室から離れ、昭和44年5月22日に財団法人近畿地区発明センター内に移りました。昭和48年1月10日に現在の場所に建物を造り、独立したのであります。当時は現在の約1／2の敷地に建造されましたが、その後、数年後に増築して現在に至っております。その当時の理事長は前田敏男先生で、常務理事に大森健二氏、事務長に青山實氏が就任していました。時代の背景もよく、協会は順調に仕事をしておりました。

当時、建築に関係ある大学の教授は協会に研究費を委託して、経理を管理してもらい、研究を遂行出来たのです。私もその例にならない昭和55年頃から協会にお世話になっておりました。昭和63年3月京都大学を定年になった時、協会にお願いして机をおき、木材の研究、特に劣化防止の研究を続けることになりました。以来20数年、腰をすえているわけです。

平成12年に大森氏が病に倒れ他界され、更に当時設計管理事業の主任であり理事でもあった西田氏も退任されて以来、協会の運営は急激に傾き始めました。平成16年当初、事務長の中谷氏と監事の青山氏が私に協会の運営を管理して頂きたいとの要請があり、今まで協会に大変お世話になってきた関係上、私で役に立つならばお引き受けいたしましようということで理事となり、面倒を見ることになりました。

当時は協会は大きな赤字で、このままでは数年後に破綻すると思われる状況でした。

私は先ず、これの解消から手はじめに策を講じました。協会の仕事は大きく分けて3つの部門から成り立っています。即ち、設計・監督、防災及び構造の3部門です。近年防災事業及び木造家屋の耐震に関する事業（構造）が増加してきまして、これらに対応する部門が不可避となってきました。従って、以上の3部門を3本柱として協会を運営することになってきました。当協会としては、これらの仕事を満足に履行するためには、人員が不足していると思われます。人員の増加という問題は協会の運営上、非常に難しい問題で、人員を増やせばよいという問題ではすまされないことで、専門知識を十分に習得した人間が必要となってきます。これらの人員を探すことは、なかなか大変なことで、目下苦慮しているところであります。

協会にはまだまだ解決しなければならない問題が、山積みしています。一つ一つ気長に処理するつもりではありますが、私も年齢のことがあり、のんびりしているわけにはいかない状況です。

何分にも協会職員の一層の御協力を期待するものであります。